



昭和7年	1人
8年	2人
11年	1人
13年	2人
14年	4人
16年	3人
17年	9人
18年	4人
19年	42人
20年	72人
21年	7人
22年	1人
合計	148人

19以下	2人
20-25	70人
26-30	30人
31-35	24人
36-40	8人
41-45	2人
46-50	1人
51-55	1人
55以上	0人
合計	138人

※戦死年不明者を除く
※年齢不明者を除く

食糧がなく苦しかった日々

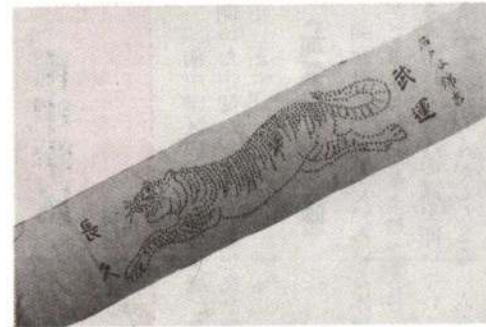
遺族の当時の思い出

☆妻 フヨさん (下川原)
(夫・秦光一さん昭和二十年戦死)
三歳と五歳の子供に「小学校に入るまでに帰ってくる」と言って行ったきり手紙もなく、そのまま帰らぬ人になりました。

☆高橋武子さん (小石台)
(高橋三好さん昭和二十年戦死)
私のいとこのことです。その当時は、何かなだかわからなく、夢中で毎日を過ごしていました。他の人たちが帰ってきたのを見て、ただ不思議でした。三好さんの父親

は九十五歳で死亡。母親は仙台で元気にしています。

☆仲沢 京子さん (二井田賢ノ里)
(夫・仲沢一也さん昭和二十年戦死)
二十歳になると必ず兵隊検査があり、一年ぐらい家において、召集されて行きました。油がないので松の根をほって油を取ったり、家中にある鉄で出来ている物(フライパンなど)は鉄砲の弾丸をつくからと言われて持っていけました。食べものがなかったので困ってしまいました。



▲千人針

☆石戸谷フミさん (高戸谷)
(長男・石戸谷信一さん 昭和十七年戦死)
米はみんなもっていかれてしまっ、ある米もたりになくて、金を出して買ったものです。食事は十分に出来なくて、不自由して

練習用の手榴弾と土崎空襲の際の爆弾の破片



いました。服も切符を出さなくては買えませんでした。とても大変でした。親、息子など兵隊にとられているため、仕事をいっぱいしました。水くみやさまざまなこと訓練しました。亡くなった知らせと一緒に海軍のぼうしと写真をよこしただけです。悲しくてみんなで泣きました。今でも思えば泣けてきます。

☆富樫キミエさん (板沢)
(夫・富樫惣之助さん 昭和二十年戦病死)
ご飯がお腹いっぱい食べられなくて、大根、大根の葉、かぼちゃをゆでて米に混ぜてご飯を食べました。砂糖もなかったの、あまいものを食べるのができませんでした。お米はみんな供出で、食べる程度しかもらえませんでした。戦時中は家の中にかくれていました。ずっと死んでいないと思っていただけ、死んだという通知がきたあとで骨箱がきましたが、遺骨は入っていない、かみの毛やつめなどだけだったと聞きました。み

戦地からの手紙

蛇川祐康さんより
母ミキエさんへ

へそのく
拜啓 秋冷の候 その後母上様にはお変わり無きやお伺い申し上げます。愚生相変らず丈夫で軍務に服しておりますのでご安心下さい。

九月十七日にお送り下さいました小包、コットン上下、その他の物品異状無く受け取りましたのでご安心下さい。今ごろは、内地で稲刈りの最中のことと透察いたしております。さぞご多忙のことでしょう。北支では、今はすべての作物が全部刈り取られ、そして支那特有の真っ赤な沃土の中に青い麦が威勢よく二寸ぐらい伸びております。見渡す限り真っ赤な沃土、そして点々と青い麦の芽に真っ白い羊の群れが見えるだけです。また、部落に入れば緑の葉の陰より真っ赤な紅の柿の実が熟しつつあるのが特に目立って美しく見えます。支那には柿の木がたくさんあり、そしてたくさんの実が結ばれております。また、それが我ら兵隊の大好物になっております。

(中略)

最後に、母上様のご健康を祈ります。寒くなってもカゼをひかないようにご注意下さい。

追伸
今は、運吉君と同じところにおります。毎日会っています。運吉君の母にもお伝え下さい。長一郎君とはすこし離れています、ときどき会っています。

できることなら靴下(丈夫なもの)、

「防災の大役 あなたが主役」
— 消火器や器具を備えて初期消火に役立てよう —